

解説2

最後の最後に、言い残していたことを少しだけ補足する。

本作の主要人物の一人・栄松齋長喜は、えいしょうさいちようき実在した浮世絵師である。活動期間も、写楽と重なっている。彼をこの役目に据えたのは、先の解説でも触れた『増補浮世絵類考』ぞうほうきよえらいこうの写本の一つに、「長喜本人が写楽の正体は齋藤十郎兵衛だと述べている」という趣旨の記述があるからである。この記述もここに書いた通り非常に素っ気ないもののだが、筆者はここから想像を巡らした。長喜も、同時代に活躍した同業の人間として、写楽のことを深く知っていたのではないだろうか。

この「想像」が、本作執筆の一つの原動力になっている。とはいえこの栄松齋長喜という人間は、ある意味写楽以上に素性がはっきりしない。本名も、出身地も、生没年も分かっておらず、浮世絵師になる前はどこで何をしていたかもほとんど記録が残っていない。ただこの手の素性も生き様もはっきりしない人物というのは、歴史小説においては恰好の材料になる。筆者も、長喜の人となりや写楽との交わり方について、分かっているなりに筆者の想像を自由に塗り付けていくことができた。

本作の主人公は、タイトルからも分かる通り写楽である。というより、筆者は当初写楽を主人公に据えることを念頭に置いて物語を書き始めた。にもかかわらず、本作の冒頭ではなかなか写楽が登場しない。筆者としては、ミステリーに見られるような一種の焦らしを入れたつもりだった。代わりに冒頭から出ずっぱりなのが、前述の長喜である。

前の解説では写楽は筆者自身の現身であると述べたが、実のところ長喜も、筆者自身の現身である。筆者は、他人というものに恐ろしいまでに興味がない（他方で、自分のことは大好きである）ので、自分以外のキャラクターを描くということはできないのである。だから、筆者の描く物語はいつも「自分」で塗れる。それは、『シトラス三国志』の方を読んでいただいても分かっ

えると思う（あの話には、劉備や曹操以外にもたくさんの「俺」が登場している）。

さて長喜も写楽も自分の現身であるとはいえ、二人のキャラクターは微妙に異なる。写楽は筆者の「自分」とことんまでに先鋭化した、ぶれないが鼻持ちならない人間である。他方で長喜は、多少はこの「自分」の矛を丸めて世の中に合わせたキャラクターであり、そのために浮世絵業界で一定の成功を収めているのである。写楽が狼だとすれば、長喜は牙を抜かれた犬なのである。そして、現在弁護士という客商売をやる中で多少なりとも世の中に迎合している筆者自身は、どちらかというとき長喜の方に近い。

物語においては、この長喜が写楽に出会う。長喜は、写楽の中に若い頃の突っ張っていた自分を見出す。長喜も、今は牙を抜かれているとはいえ、その性質の根本は写楽と一緒にあり、若い頃は写楽のように無意味に（より正確に言えば、無意識に）周囲と摩擦していたのである。そんな感じでぶれない写楽を見て、長喜は恥じる。若い頃の自分を見ているようで穴があいたら入りたくないような気持ちになる。あの時の自分は、周囲にこんなにも痛々しく、滑稽に映っていたということに今更気が付いて、やり場のない憤りに五体を引き裂かれそうになる。写楽に出会うまでそのことに気付けていなかった（すなわち、自分を客観視できていなかった）自分の鈍感さに対しても憤懣やるかたない思いを覚える。

それでも、傍らで一人悶え苦しんでいる長喜には無頓着で、ひたすら我が道を行く写楽に、長喜は次第に感化されていく。金や名誉と引き換えに今の自分が失った「牙」をこの男は持っている。写楽は厳然確固として、「写楽」である。対する自分は、果たして何者なのであろうか。

長喜はやがて、今持っている金も名誉も全て吐き出して、失った牙を買い戻すことを決意する。その博奕の勝ち目が、薄いことを十分に認識しながら。

これが、この物語のあらすじであるが、こう書くとき完全に長喜が主人公である。まあ、長喜も写楽と同じく作者の現身であるため、主人公に変貌するポテンシャルは持ち合わせていたのは確かである。だから、書いているうちに写楽

という現実味のない超人への愛着がどんどん薄れていき、この超人に感化されて超人になろうとした凡人が主人公に変わってしまったのである。本来は先の解説で書いたように、写楽にこの「凡人」の役目を担わせるつもりだったのだが、誤算だった。まあ、よくあることだろう。天才バカボンだって主人公はバカボンではないのである。

さてまあ、改めてこの解説2を読み返してみると、本作が大したことを言っていないというのがよく分かる。「社会に迎合するために自分を枉げることの苦しさ・おかしさ」「その状態から自分を取り戻そうとするためのもがき」なんていうのは、古来からある手垢塗れのテーマである。又吉の『火花』だってそうだろう。改めて本作を見ると、写楽の姿が神谷に、長喜の陰が徳永に非常によくかぶる。まあ、この種の物語は本質を突いているからこそ何度も手を変え品を変え出てくるのだろうが、裏を返せば客も同じような話を何度も見せられているということなのである。小説というのは、言いたいことを具体的なエピソードの裏に隠して煙に巻く表現手法だというのは筆者が何度も述べているところである。だから、この解説のように、作者は言いたいことを自ら明らかにする義務があるというべきである。そこんところをよく分からないままに放置するから、読者がおんなじような話を何度もつかまされることになるのである。